

S O U 奏

Early Summer 2025

JTB 感動のそばに、いつも。



世界と日本をつなぐ瞬間をともに

今や国内にいても気軽に世界の情報が手に入る時代です。
画面越しでもきれいな映像は見ることはできますが、
本物のリアルはそこにあるのでしょうか。

人はアフリカで誕生し、世界中を移動しながら進化をした動物です。
見知らぬ土地に行き、「何かに直接触れる」ことが本能ではないでしょうか。
関西でたくさんの世界に触れる機会が訪れています。
一生モノの瞬間を共に楽しみませんか？

私たちJTBは世界に触れる旅のお手伝いをいたします。

(株)JTB大阪第二事業部

〒541-0056
大阪市中央区久太郎町 2-1-25 (JTBビル12階)
TEL.06(6260)0150(代) FAX.06(6260)0178
担当: 岡田 悠

VOL.
63

CONTENTS

- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| 1 プロデューサーが往く 世界の室内楽の現在 | 11 民族楽器で旅する世界 vol.5「インドネシア」 |
| 3 ほのかカルテット現地レポート | 13 作曲家の部屋 vol.5 チャイコフスキーとクリン |
| 5 素顔の西村朗、その人と音楽 | 15 名曲誕生! vol.4 セザール・フランク |
| 7 グランプリ・コンサート2024 ツアー同行記 | ヴァイオリン・ソナタと弦楽四重奏曲 |
| 10 こどもクラシックミュージックアトリエvol.7報告 | 17 第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ募集開始 |

編集・発行 JCMF 公益財団法人 日本室内楽振興財団

〒540-8510 大阪市中央区城見1丁目3-50
TEL.06-6947-2183 FAX.06-6947-2198
<https://jcmf.or.jp>

プロデューサーが往く！
世界の室内楽の現在

ほのカルテット ドイツの巨匠サヴァリッシュの地で出演

河井 拓 大阪国際室内楽コンクール&フュネタ 総合プロデューサー



サヴァリッシュ邸でのコンサート。詰めがけた地元室内楽ファンの目の前で演奏

2023年のコンクールで特別賞を受賞したほのQが、
ミュンヘンでの招待公演に出演。それに合わせて、ウォ
ルフガング・サヴァリッシュ財団でのコンサートにも出演
し、氏の残した芸術遺産に触れる旅となった。



ほのQを挟んで、左からヘンシエル、バウムガルトナー、コンサートを共同主催した
フェスティバル4のウルリケ・カイル



ドイツの巨匠
ウォルフガング・サヴァリッシュ

指揮者、ピアニストとしての サヴァリッシュの歩み

「今世界中で指揮者と呼ばれる人は何千、いや何万といるだろう。しかしその中で、急に、今晚、此のオペラを振ってくれないかと交渉されたとき、そのすぐ振れるレパートリーの多さで世界一といったらカラヤンでもなければクライバーでもない。それはサヴァリッシュ先生においてほかにないと思つては思つ。」

これは、ウォルフガング・サヴァリッシュ（1923-2013）の著書「音楽と我が人生」（訳：真鍋圭子）に寄せた、実業家であり音楽家でもあったソニー元会長の大賀典雄の言葉である。

サヴァリッシュといえば、日本ではNHK交響楽団の指揮者としてもしくはバリトンのヘルマン・フライの共演者として記憶に残っている人も多いだろう。N響との公演の多くはテレビで放送され、今なお人々の目に留まることもある。

ドイツのミュンヘンに生まれたサヴァリッシュは幼少期よりピアノで音楽の才能を開花させ、11歳の時に観たオペラに感激して指揮者を志すことになる。第二次世界大戦に

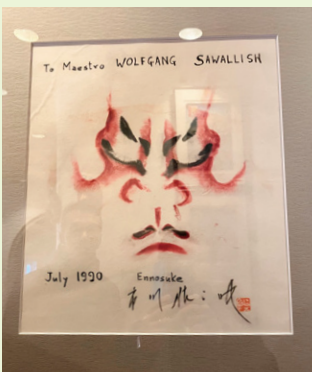
徴兵されてアメリカ兵との戦闘に巻き込まれながらも無事に帰還した後、類稀な才能から音楽院を入学から3カ月で卒業して、音楽家としてのキャリアを順調にスタートさせた。

指揮者を志しながらも最初はピアニストとしての活動も多く、特に室内楽に没頭していた時期もあり、ヴァイオリニストのゲルハルト・ザイツとは1949年に、難関のジュネーブ国際音楽コンクールの二重奏部門で1位無しの2位を受賞している。後年は指揮活動の合間にピアノを演奏することになるが、日本でもN響メンバーとの室内楽を披露している。（ちなみに大阪国際室内楽コンクール前審査委員長の堤剛とは、ブラームスのチェロソナタの録音も残している。）

指揮者としてドイツ国内で王道ともいえる出世街道の役職を歴任し、オペラとシンフォニーの両面で活躍を続け、ワグナーの殿堂バイロイト音楽祭には当時最年少である33歳で「トリスタンとイゾルデ」を指揮してデビューしている。ドイツ国内で評価を確立した後、イギリス、オーストリア、スイス、イタリア、アメリカの楽壇でも要職に就くなど、世界中で華々しい活躍を収めた。

サヴァリッシュ日本へ。そして残された想い

日本では1964年に、N響からの熱烈な要望に応じて初出演した。当初は欧州と日本の風習の違いに馴染めず、ストレスに感じていたようだが、N響との公演の成功と周囲の人々の対応が次第にサヴァリッシュの心を東京に馴染ませていった。その後は



1990年に市川猿之助から贈られた限取。
日本との親交の深さがうかがえる。

いたが、日本では2004年の公演が最後となり、その2年後には体調不良から音楽活動を引退した。

2013年にサヴァリッシュが鬼籍に入つたのち、彼の意志を継承するためにサヴァリッシュ財団が設立され、音楽や芸術の教育、普及のために、若い音楽家のための助成金給付、定期的なコンサートやマスタークラスが行われている。現在は指揮者のアンドレアス・バウムガルトナーが理事長となり、大阪で次回コンクール審査委員長を務めるモニカ・ヘンシエルとも親交があることから、2023年の大阪のコンクール入賞団体のためのコンサートが開催されるに至った。

ほのカルテット 日独文化交流の一翼を担う

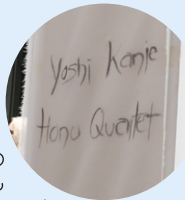
2023年のコンクールで2位を受賞したほのカルテットは、「アンバサダー特別賞」として2024年12月にドイツに招待された。サヴァリッシュ財団に行く前に、まずはミュンヘンのピナコテーク・デア・モデルネ（現代美術館）で、モニカが率いるヘンシエル&フレンズとのコンサートに出演する。



メンデルスゾーン八重奏曲。天井の高い空間に、弦楽器の良いハーモニーが響く



アカーマンの作品。細い線の一つ一つは水墨で描かれたテキストで構成されている



会場には
ほのカルテットの
蜷江のテキストも
アートに引用されていた

サヴァリッシュが没して10年、そして日本の楽壇から姿を消して20年となる。サヴァリッシュ財団とモニカ・ヘンシエルの「日独文化交流の中で、サヴァリッシュの精神を今以上に広く浸透させる」という希求のために、大阪のコンクール、そして日本の音楽界として出来ることを模索したい。

ほのQは「Boids again」の他、メンデルスゾーン第一番とベートーヴェンの不朽の名作である第7番「ラズモフスキー第一番」を披露した。少々硬質な響きながらも、たつぷりな情感で歌い上げる岸本とそれを支える3人の堅固なアンサンブルは、日本を代表する弦楽四重奏団の一つとして、サヴァリッシュ邸に集まる室内楽ファンを愉しませていた。4人にとって短い滞在だったが、今後の活動のための様々な「種」を得ることが出来ただろう。今後その種を芽吹かせていくことを期待したい。



ほのカルテット HONO Quartet

2018年1月結成。全員、東京藝術大学在学中に結成。古典作品を中心に取り組んでいる。五嶋みどりプロデュースICEPメンバーと共演し、五嶋みどり氏にアドバイスを受ける。始動半年で第4回宗次弦楽四重奏コンクールにて第3位、及びハイドン賞受賞（課題曲賞）。2019年5月、第8回秋吉台音楽コンクール弦楽四重奏部門にて第1位受賞。2021年度プロジェクトQ第19章に参加。2020年より現在、松尾学術振興財団の奨学金を受ける。2023大阪国際室内楽コンクールにて第2位とアンバサダー賞受賞。これまでに松原勝也、市坪俊彦の各氏に師事。現在、山崎伸子女師の元で研鑽を積んでいる。



カルテットとして初めて国外での演奏会に、飛行機に乗る前から期待と緊張が入り混じった不思議な気持ちでした。

現地に着いてからは、ヘンシェル・カルテットの皆様に非常にあたたく受け入れてくださりとても心強かったです。

同じ音楽家として彼らと同じ場所で音楽を演奏できることがとても嬉しく、リハーサルから当日までは夢のような時間でした。様々な方と出会い、たくさんの意見や考えを頂けました。日本では感じる事ができない、ヨーロッパならではの気候や人、街並みを存分に味わいながら充実した約1週間を過ごせたなと感じています。

また、本場ドイツでベートーヴェンの弦楽四重奏を演奏出来たことはカルテットにとって非常に有意義な経験になったと思っています。

もう一度、この4人でヨーロッパで演奏会が出来ることを目標にこれからも日々研鑽を積んでいきたいと思います。



長田健志 (ながたけんし)
ヴィオラ
Kenshi Nagata

私は国外のセミナーなども参加したことがなく、今回のミュンヘンでの演奏がほのカルテットにとって初となる海外進出でした！それも音楽の聖地であるドイツで演奏できたことはとても嬉しく思います。

カルテットとヘンシエルの皆様とオクテットを演奏したピナコ現代美術館ではその建物の構造を生かして3曲それぞれ違う場所で演奏するという珍しい舞台でした。コンサートホールではありませんが天井がとても高く白を基調とした空間は響がよく混ざり合いコンクールでも演奏した望月京さんの「ボイズ・アゲイン」とイメージがとても親和性が高かったと感じています。終演後現地のお客様から素直な感想を頂けたり少しですが会話を交わす時間も、音楽が好きな人が本当に多い街なんだと嬉しく思いました。

音楽や弦楽四重奏に対する想いをおいシェアできたこと、一緒に共演した人たちヘンシェルさん達だけでなく公演に携わってくださった皆様と出会えたことは私にとって今後の活動の源になる大切な出会いだったと思います。



蟹江慶行 (かにえよしゆき)
チェロ
Yoshiyuki Kanie



ほのカルテット 現地レポート HONO Quartet

ほのカルテットがドイツでの室内楽フェスティバルに出演しました！

大阪国際室内楽コンクール2023でアンバサダー賞を受賞したほのカルテットが、昨年12月にドイツのミュンヘンで開かれた招待公演に出演しました。カルテットとしては初めてとなった海外公演のレポートです。



ほのカルテットにとって、初めての海外公演。まず出国する飛行機の中からいつもの4人の空気とは違いました。わくわく、とにかく楽しんでやる！という雰囲気が出ていてとても良い雰囲気。

私が藝大時代から憧れていたヘンシェル・カルテットとの共演機会もいただけたとのこと、4人でたくさん勉強していたので、あとは現地で触れ合って楽しむだけ！とはいえ少し緊張していましたが、彼らが本当にあたたく迎えてくれ、同じ目線で、音楽的で刺激的なリハーサルができたことが私たちにとって本当に忘れられない経験となりました。翌日のサヴァリッシュ邸での演奏会前には彼の住居や、愛用していた指揮棒、数々の写真を見せてもらいました。近くに他の家や建物はなく、静かで自然だけに囲まれていて気持ちが安らぐ空間。私もいつか住んでみたいなと思いました。帰りのトランジットの入国審査が混雑しすぎて出発時刻に、初めて呼び出されたのは良い思い出です。笑



岸本萌乃加 (きしもとほのか)
1stヴァイオリン
Honoka Kishimoto

僕達ほのカルテットは、アンバサダー賞を頂き、ドイツのミュンヘンで演奏させて頂きました。クラシックが生まれたヨーロッパで日本人として演奏できる事はとても感慨深かったです。(外国の方が歌舞伎の舞台に乗る気持ちでした笑)今回感じた事は沢山あります！メンバーと初めての海外だったので、よりチームワーク力が高くなったと思いますし、時差ボケの中2時間のリサイタル、ヘンシエルの皆様との共演、そして外国語でリハーサルを進めなければいけない事、生活環境が違う中、最高のパフォーマンスをする大変さを学ばせて頂きました。こんな素敵な機会を頂けたのは、今まで支えて下さった家族、先生方、お客様、切磋琢磨しながら音楽に向き合えるメンバー、そして大阪国際室内楽コンクールに関わって下さったスタッフの皆様のお陰です。いつもありがとうございます。カルテットは最高に楽しいです。続けていく事はとても大変ですが…笑

頂いた賞に誇りを持って、ほのカルテットで色々な作品を、日本だけでなく海外でも演奏したいです！応援の程よろしくお願いいたします。



林周雅 (はやししゅうが)
2ndヴァイオリン
Shuga Hayashi



Akira Nishimura (1953-2023)

素顔の西村朗、 その人と音楽



©東京オペラシティ 撮影：大窪道治

小味 洵彦之（音楽評論家）

関西学院大学、および同大学院で音楽学を学ぶ。演奏会のための曲目解説、新聞、雑誌での演奏会の音楽評を執筆するほか、コンサートのプロデュースも手がけてきた。豊中市立文化芸術センター総合館長。同志社女子大学准教授、関西学院大学、武庫川女子大学非常勤講師。いずみシンフォニエッタ大阪ステージマネージャー。

「西村朗の音楽」との出会い

西村朗の音楽を初めて意識したのは《2台のピアノと管弦楽のヘテロフォニー》という1987年に書かれたオーケストラ曲の演奏をテレビで見た時でした。1988年5月23日にサントリーホールで開かれた「N響ミュージック・イン・フューチャー」という尾高賞受賞作が取り上げられる演奏会のライブ収録で、当時の番組表を見ると、コンサートから1ヶ月もたない6月12日にNHK教育テレビで放送されています。曲目は尾高賞を同時に受賞した湯浅譲二の《ピアノとオーケストラのための「啓かれた時」》、ヴィオラ独奏：川崎和憲のほか、初演の「柳慧」ピアノ協奏曲第2番「冬の肖像」《ピアノ独奏：木村かをり》と、日本初演だったルトスワフスキの《交響曲第3番》でした。外山雄三指揮のNHK交響楽団の演奏です。西村作品のソリストは初演と同じ神野明と佐藤俊。この時に感じた音楽の印象は正直に記すと「とても気持ち悪い」というものでした。

《2台のピアノと管弦楽のヘテロフォニー》は冒頭から「ファ（F）」の音が小さな音からのクレッシェンドで2台のピアノで同音連打されつつ、マリンバ、ハープも同音のトレモロで、クラリネット、トロンボーンでも同じ「ファ」の音が長く伸ばされて始まり

ます。すぐに2小節目の終わりから長2度上の「ソ（G）」の音を加えての変化が各楽器にあり、さらにクラリネットにはそれ以前から、ごく僅かの音程の変化が求められていています。後年の作品ではうねりの中に収斂して響きの輪郭が形作られていくのですが、無数の音がまだバラバラのまま、細かくズレた状態で重なり合いながら響きを発しています。

当時、西村は30代半ばの新進気鋭の作曲家でした。いわゆる音楽評論に類する文章も相当数を『レコード芸術』誌に発表していた時代で、その内容からはマラーやブルックナーなど、後期ロマン派を愛好する好事家としての素顔も浮かび上がってきます。「ヘテロフォニー」とは西村朗作品のトレードマークで、同じメロディを複数で奏でた時に、即興的な装飾や変化によつて音程やリズムがずれる状態のこと。決してヨーロッパの音楽には見出せない要素であり、その意味で「気持ち悪い」と感じた高校生当時の私の感覚は、オーケストラというヨーロッパの文化を象徴する合奏体が奏でる音楽として異質であることを、無意識につかみ取っていたわけです。《2台のピアノと管弦楽のヘテロフォニー》には、こうした「ヘテロフォニー」がまさにピュアな状態で実現されていました。

「作曲家・西村朗」のルーツ

「ワールド・ミュージック」という言葉があります。直接的には世界各地の伝統的な音楽や民族音楽を指すのですが、1980年代後半に、こうした要素を取り入れたポピュラーミュージックのことが、コマーシャルリズムの中で盛んに「ワールド・ミュージック」と呼ばれてヒットを繰り返しました。世界各地の民族音楽は古くから好んでポピュラーミュージックに取り入れられてきましたが、この時代はその何度目かのブームでした。ロス・ロボスがカバーした《ラ・パンバ》が、かつてこのメキシコ民謡を歌ったリッチー・ヴァレンスの同名の伝記映画の主題歌として世界中で大ヒットしたのは、まさに西村の《2台のピアノと管弦楽のヘテロフォニー》が書かれた1987年です。その頃は丸々と太った姿をしていた西村はいかなる思いでこの作品を綴ったのでしょうか。

西村が東京芸術大学で作曲

「西村朗、その人」との出会い

1999年から、いずみホール（当時）でステージマネージャーを務めた私は、ほどなくして実際に「作曲家・西村朗」と出会うことになりました。1999年度で開館以来10年続いた、岩城宏之と武田明倫の企画監督による「音楽の未来への旅シリーズ」が、大阪生まれであった西村を音楽監督とするいずみシンフォニエッタ大阪の活動を軸とする枠組みに受け継がれたのです。演奏会のリハールと本番の過程の中で接する西村の姿は、自作をいかに理想的な形で聴衆に届けるのかを模索する作曲家のイメージ通りの人でした。決して多弁ではなく、書いた音符でものを言うタイプ。そこに大阪出身の「おもしろさ」は浮かび上がってはいなかったのですが、「白ワインはオンザロックで飲むのが美味しいんや！」と、嬉々としてホ

テルのバーでウィングラスに氷を入れた姿に接して、印象が変わりました。同席した人にもその飲み方を勧め、とうとうとその合理性を説く姿に、大阪人としての気取りのなさを感じたものでした。

人とその人が創った音楽のキャラクターは必ずしも一致するものではありませんが、西村朗が綴った音楽の饒舌さの原点は、彼の大阪人としてのバイタリティにルーツがあるような気がしてなりません。今回の3団体合同企画としての開催されるコンサートシリーズの「曲がった家を作る人」というタイトルの感想をご本人に聞くことはできませんが、「人の本の題名とつてー」とおっしゃりつつも（自伝的エッセイ集の題名が『曲がった家を作るわけ』、まんざらでもない顔をされるのでは、と思います。

〈3団体合同企画〉曲がった家を作る人 ―故郷に響く 西村 朗の音楽

7/10 (木) 19:00 パーカッション・アンサンブル 会場：読売テレビ10ホール 〒540-8510 大阪市中央区城見1-3-50 読売テレビ本社屋1F TEL：06-6947-2184

チケット料金（全席指定）：一般 4,000円／学生 2,000円 ※全席指定ですが、お客様にご希望のお席をご指定いただくことはできません。あらかじめご了承ください。

【曲目】 観（カムナギ）十七絃箏と打楽器のための（1992）／エクタール 3人のマリンバ奏者と2人の打楽器奏者のための（1992）
キトラ 8台のマリンバのための（2019）／ペンタ 5人の打楽器奏者のための（2020）／ケチャ 6人の打楽器のための（1979）PA：永松ゆか、牛山泰良

【出演】 Soai Percussion Ensemble ※ 片岡 リサ（十七絃箏）

※パーカッション：中谷 満、宮本 晏子、畑中 明香、川向 志保、松本 優輝、石垣 真結子、落合 空千、小野 竜聖、花田 零、星山 理奈、高 眞炫、川久 珠寿、林 壮馬、松本 知暁

主催：公益財団法人 日本室内楽振興財団 協力：相愛大学

西村 朗(1953-2023)

大阪市に生まれる。東京藝術大学卒業、同大学院修了。日本音楽コンクール作曲部門第1位（1974）、エリザベート国際音楽コンクール作曲部門大賞（77・ブリュッセル）、ルイジ・ダルツラビッコラ作曲賞（77・ミラノ）、尾高賞を6回（88・92・93・08・11・22）、中島健蔵音楽賞（90）、京都音楽賞【実践部門賞】（91）、第36回（04年度）サントリー音楽賞、第47回毎日芸術賞（05）等を受賞。2013年紫綬褒章を授与される。この他、02年度芸術祭大賞に「アルディッティSQプレイズ西村朗『西村朗作品集5』」が、05年度芸術祭優秀賞に「メタモルフォーシス・西村朗室内交響曲」が選ばれる。2000年よりいずみシンフォニエッタ大阪の音楽監督に就任、NHK-FM「現代の音楽」の解説や「N響アワー」の司会者を務める。2010年草津夏期国際音楽フェスティバルの音楽監督に就任。東京音楽大学教授。2019年2月には、新国立劇場6年ぶりとなる創作委嘱作品・世界初演「紫苑物語」がオペラ芸術監督大野和士の指揮で上演され、大成功を収める。2023年9月7日69歳で死去。



室内楽のプロデューサーって、どんな風景を見ているのだろう？筆者は音大卒だが、アーティストのサポート役として舞台裏の世界に踏み込むのは今回が初めてだった。2024年11月、例年より暖かい秋の中、日本室内楽振興財団から貴重な機会をいただき、大阪国際室内楽コンクール&フェスタ2023の第2部門優勝団体であるカピバラピアノ・クォartetのグランプリコンサート国内ツアーに、最初から最後まで同行することができた。

Capybara Piano Quartet



カピバラ・ピアノ・クォartetと河井プロデューサー（左端）と筆者（右端）

音楽家であり、若者であり

10月31日、待ち合わせ場所は羽田空港。メンバー4人とは初対面で最初は少しぎこちない雰囲気。しかし年齢が近いこともあって、カジュアルな英語で話しかけると少しずつ打ち解けた。

ヴァイオリンの岡田脩一は、落ち着いた低音ボイスの持ち主で、明るく社交的な性格。インタビュなどではメンバーを代表して発言することが多く、頼れる存在である。フランス語の発音が特徴的で、仲間にいじられている姿が微笑ましかった。



岡田 脩一(ヴァイオリン)
Shuichi Okada, violin

ヴィオラの近衛剛大は、天真爛漫で陽気なキャラクター。メンバー最年少ながら、実はこのアンサンブルを結成するきっかけを作ったのが彼だったようだ。ある日本のコンビニで販売されているアイスにハマリ、毎日購入していたというエピソードが可愛い。



近衛 剛大(ヴィオラ)
Takehiro Konoe, viola

ピアノのマリオ・ヘリングは、一番年上で穏やかな性格で、笑顔がとても素敵で親切。オフの日でも一人でスタジオ練習するほど自主練に励む努力家だ。プライベートではよくゲームに没頭しているらしい。



マリオ・ヘリング(ピアノ)
Mario Häring, piano



ミンジョン・キム(チェロ)
Minjoung Kim, cello

「自由に楽しく演奏したい」という理念で集まった4人が、リハーサル中もフラットで平等なディスカッションを交わし続け、最高の公演を目指して全身全霊で臨んでいた姿が印象的だった。

その後、神奈川県海老名市に移動。スイーツケースを持って会場入りしたが、そのせいなのか本番衣装がシワだらけになり、近衛が少し困っていた。幸い、会場スタッフにアイロンを貸してもらえたおかげで無事に衣装を整えることができた。ツアー中は見た目の管理も大変だと感じた瞬間だった。

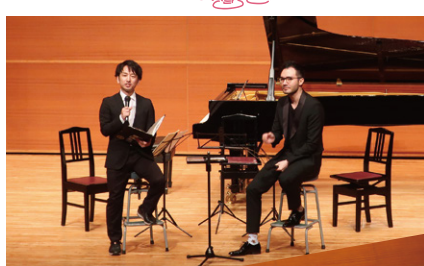
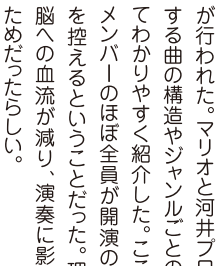


ミンジョンが自ら描いた楽屋表示



ホールの記念サインボードに
いっぱいカピバラを描いている
メンバーたち

次は静岡県沼津市の市民文化センターでの公演。事業担当者の要望に応え、プレコンサートトークが行われた。マリオと河井プロデューサーが演奏する曲の構造やジャンルごとのアプローチについてわかりやすく紹介した。ここへ気づいたのは、メンバーのほぼ全員が開演の3時間前から食事を控えるということだった。理由は消化により脳への血流が減り、演奏に影響が出るのを防ぐためだったらしい。



沼津市民文化センターでの
プレートク

リハーサルや、ディスカッションを
重ねるメンバーたち



サイン会が終わった後、サインペン
で遊んだ近衛とマリオ

KUMAMOTO



舞台の外

最初の目的地は熊本県。到着した10月31日の夜はハロウィンで街は賑やか！熊本市民のクリエイティブな変装に驚嘆しながら、地元の会席料理で英気を養う。

ミンジョンは唯一日本ルーツを持っていないメンバーで、初めて馬刺しにチャレンジしていた。コンピースファンの近衛は、オフの時間を活用してたつぷり聖地巡礼を楽しんだという。初日の公演は、もちろん大成功だった。



リハーサルの様子



MIYAZAKI

次の公演は宮崎県小山市。小山市といえば、方言がフランス語に似ていると言われる町だ。そんな町で、館長さんが自ら会場の雰囲気を持し、地元の人々との緊密な関係性に心がほっこりした。



リハーサル休憩中、写真好きの近衛が
メンバーを撮影



公演が終わった後のメンバー自撮り

KANAGAWA



OITA

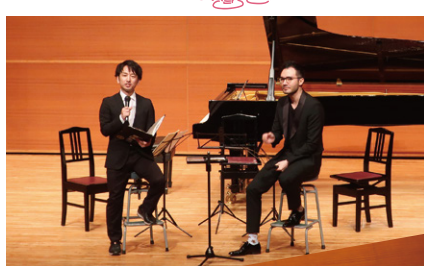


次の公演は大分県国東市。リハーサルが終わった頃、市長さん自らがご挨拶に訪れ、メンバーたちは励まされ意気込んで演奏に臨んでいた。人口約2万5千人の町だが、行政サービスによる招待コンサートに300人以上が来場した。どうもありがとございます！

MIE



SHIZUOKA



沼津市民文化センターでの
プレートク

リハーサルや、ディスカッションを
重ねるメンバーたち



サイン会が終わった後、サインペン
で遊んだ近衛とマリオ

TOTTORI



OSAKA



こどもクラシック ミュージックアトリエ



主催事業レポート



2025.3/28(金) ①14:00-15:00 参加者 20組64名
②16:30-17:30 参加者 23組59名

住友生命いずみホール

対象：4～9歳の子とその保護者

料金：無料(事前応募によるご招待)

出演：カルテット・アトリエ(ヴァイオリン：上敷領 藍子・相原 瞳
ヴィオラ：後藤 彩子、チェロ：佐藤 響)

主催：公益財団法人 日本室内楽振興財団

住友生命いずみホール(一般財団法人 住友生命福祉文化財団)

後援：読売テレビ、大阪市

演奏曲

コダーイ：インテルメッツォ

グラスノフ：弦楽四重奏曲第3番「スラヴ」第1楽章

ストラヴィンスキー：弦楽四重奏のための3つの小品 第1曲

ストラヴィンスキー：弦楽四重奏のための3つの小品 第2曲

メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲第2番 第3楽章

グラスノフ：弦楽四重奏曲第3番「スラヴ」第4楽章

ダンクラ：きらきら星変奏曲

モーツァルト：弦楽四重奏曲第17番「狩」第4楽章

「こどもクラシック ミュージックアトリエ」は、調査研究事業「子ども向け音楽プログラム開発」の研究の一環として、2022年より住友生命いずみホール(一般財団法人 住友生命福祉文化財団)と共同で実施しています。

7回目となる今回のコンサートは、絵本「すてきな三にんぐみ」(トミー・アンゲラー作/今江祥智訳、偕成社刊)がテーマ。3人のどろぼうがお宝を奪い集めていたあるとき、女の子と出会い、それをきっかけに素敵な街ができあがるまでのストーリーが描かれています。

カルテット・アトリエの演奏に導かれながら、子どもたちは絵本の世界へ!

三にんぐみが出会う人に武器を持って襲いかかる場面では、
〈ストラヴィンスキー：弦楽四重奏のための3つの小品 第2曲より〉が演奏され、息を飲むよう

大まさかりやラッパ銃、帽子などの小道具は、チェロの佐藤さんによる手作り! 絵本に描かれている色に合うよう、細部までこだわって形にしてくださいました。



お客様の声 (アンケートより抜粋)

- ♪子どもが楽しめるように色々な工夫がされていて、手の込んだ演出でした。マントやラッパなどの小道具も、最後に見せてもらってました。
- ♪絵本に曲が絶妙に合っていて引き込まれました。
- ♪音楽が変わると、絵本の印象まで変わることが肌で感じられて大人も面白かったです! 音楽を自由に感じていいし、楽しんでほしいというメッセージが伝わってきて素敵でした。
- ♪バイオリンを自分で弾いたのがものすごく刺激的だったようです。

次回予告

こどもクラシック ミュージックアトリエ vol.8

事前応募・招待制

2025.8月 2回公演予定 住友生命いずみホール

対象・応募方法等の詳細は決定次第、日本室内楽振興財団ウェブサイトでお知らせします。

な緊張感が漂いました。物語のラストシーンでは〈グラスノフ：弦楽四重奏曲第3番「スラヴ」第4楽章より〉の力強くドラマチックな演奏が、できあがった素敵な街を彩ります。

演奏後、「ところで、怖い感じの曲じゃなくて別の曲をつけてみたらどうかな?」と問いかけるメンバー。今度は皆知っているメロディを題材にした「きらきら星変奏曲」とともにお話を聞いてみることに。すると、さきほどの怖い場面がどこかポップで楽しそうなお話に感じられたよう!

最後に「どっちが好きだった?」と問いかけると、子どもたちの意見はそれぞれ。「音楽には気持ちや考え方を変える魔法みたいな力があるんじゃない?」という問いかけでコンサートは幕を閉じました。同じストーリーでも、伴う音楽の力で世界観が大きく変わるといことが、子どもたちにしっかり伝わったようです。

開演前、終演後はロビーでヴァイオリン体験を開催! 初めて触れる楽器に夢中になって音を出す子どもたちの様子が印象的でした。



後藤彩子さん(ヴァイオラ奏者)に お話を聞きました

このコンサートは、日本室内楽振興財団の調査研究事業委員として後藤彩子さんが中心に企画しています。今回の題材や選曲の意図を聞きました。



後藤 子どもにとっては最初はちょっと怖いと感じる絵本だからこそ、音楽の力で印象を変えられる。音楽は「うれしい」「楽しい」だけでなく、様々な感情を表現できることを伝えたかったのです。聴く人それぞれが自由に感じ取れるように、色んな系統の音楽を盛り込みました。



ドッキリの後、「脩一の顔、見た?」って楽しそうなメンバーたち



TOYAMA

TOKYO

HIROSHIMA

広島県庄原市での公演は11月15日、特別感のある公演となった。通常アンコール曲として演奏しているエルガーの「愛の挨拶」は、冒頭がピアノソロで始まり、他の楽器が順次加わる編曲だった。しかし、この日の舞台では、マリオがピアノを弾き始めると同時にヴァイオリンとチェロの音も一気に響いた!なんと、ヴァイオリンの岡田だけが落とされていった。実は、ここで演奏されたのは「愛の挨拶」ではなく、「ハッピーバースデー」だった。11月16日が岡田の29回目の誕生日だった。その日は公演の予定がなかったため、前日の15日に祝おつと決めたそう。岡田だけが知らされていなかったこのサプライズに、彼の戸惑った表情を真似して笑つたメンバーたちがとても楽しそうだった。もちろん、誕生日の曲が終わった後には、しっかりと「愛の挨拶」も演奏された。



日本テレビさんのインタビューを受けている様子

心温まるエピソードが生まれた広島公演が終わわり、ツアーはいよいよ終盤へ突入。次の公演地は東京のトッパンホール。クラシック音楽の激戦区であり、室内楽に特化したこのホールは音響が非常に美しい一方で、観客の耳も肥えていると感じた。河井プロデューサー曰く「程良い緊張感がある」。この日も特別な公演で、主催の日本テレビ小鳩文化事業団のご招待で目の不自由な方が多く来場されていた。メンバーたちは非常に意義深いと感じたように、真剣で情熱的な演奏を披露し盛大な拍手をいただいた。

今回のツアーは、比較的天候に左右されず、滞在地が日々変わることもしばしばあった。メンバーたちは舞台上では常にプロフェッショナルで疲れた顔を見せなかったが、ほぼ毎日全国各地を回りながら演奏するのは、体力だけでなく精神的にも大きな負担だったと想像する。それでも最後までやり遂げたメンバーたちに「グッド・ジョブ!」と言いたい!

そんなメンバーをスタッフも適切にサポート。交通機関の情報は常にチェックし、大雨で新幹線の遅延が予想された際には、迅速にタクシー移動に切替。早朝のモーニングコールを入れたり、空港では楽器ケースの運搬手続きを支援したりと、スケジュールに影響を及ぼすリスクを最小限に抑えた。

また、各ホールのアコースティックデザインに応じた演奏も意識してきた。例えば、会場によってはチェロは低音域が聞き取りにくい。そのため、シミュレーションには強めに音を出すようアドバイスした。シューマンの第三楽章の冒頭ではチェロとヴァイオリンのデュエットが中心となり、ヴァイオリンの出番が少ないため、近衛はリハーサル中、客席に移動して全体の音響バランスを確認し、自分のパートが始まる直前に舞台上に戻ることもあった。さらに、音の断奏(スタッカート)が曖昧になりがち。ウエットなホールでは、音の切れを意識して演奏したり、斜めの天井反射板に合わせてピアノと椅子の位置を微調整したり。こうした細かい調整は、公演の質を大きく左右する重要なポイントだった。

ツアーの裏の工夫



こうして、公演毎にお客さまに最高の音楽を届けるための努力をしてきた。このような努力は、しっかりと報われていたと思う。

例えば、国東市での公演後、サイン会が終わるまでキキリとした目と笑顔で見守り続けたご婦人がメンバーたちと写真を撮れた瞬間に歓声を上げ、「また来てくださいね!」と元気よく声をかけていた場面は忘れられない。又、東京のトッパンホールで、前列のお客さまが終演時に掲げた応援ボード。そこに書かれた「BRAVO!!!」という文字を見てメンバーもスタッフも胸が温かくなり、とても感動した。

そしてツアー中で特に印象的だったのは、公演が終わる舞台袖に戻るたびに、メンバーたちが必ずお互いに「よくやった!」とハグをしていたこと。こうした小さな瞬間こそ、尚更プロデューサーとしてのやり甲斐を感じた。

筆者がプロデューサーを目指す原点は、「より多くの人にクラシック音楽の素晴らしさを伝えたい」という思いにある。クラシック音楽は高嶺の花のように思われがちだが、結局は「人」が作り、「人」が楽しむもの。音楽を通じて人々が集まり、互いの個性を尊重し合い、つながりを感じる。そうした音楽が持つ人間味が好き。これからも一人前のプロデューサーを目指して頑張っていきたい!

グランプリ・コンサート2024 全国スケジュール

11月		
2(土) 14:00	熊本	益城町文化会館
3(日) 14:00	大分	くにさき総合文化センター
5(火) 19:00	宮崎	小林市文化会館 小ホール
7(木) 11:30	三重	三重県文化会館 大ホール
8(金) 14:00	神奈川	海老名市文化会館 小ホール
9(土) 14:00	静岡	沼津市民文化センター 小ホール
11(月) 19:00	大阪	住友生命いずみホール
14(木) 19:00	鳥取	鳥取市文化ホール
15(金) 18:00	広島	庄原市民会館
17(日) 14:00	東京	トッパンホール
18(月) 19:00	富山	富山県高岡文化ホール 大ホール

民族楽器で
旅する世界

インドネシアの民族楽器

発展めざましい南アジアの大国
インドネシアで守られる伝統音楽

世界で第4番目の人口を持つ大国となったインドネシア。たくさん島の島で構成され、また火山活動も盛んな点は日本とも似ている。インドネシア各地域では独自の音楽文化が花開いたが、そのなかのガムランを中心に紹介する。

構成文／片桐卓也

1956年福島県生まれ。大学在学中からフリーランスの編集者＆ライターとして活動を始め。1990年頃から本格的にクラシック音楽の取材・執筆を始め、現在はクラシック音楽専門誌などに、演奏家のインタビューや、コンサートなどの批評などを書いている。好きな音楽ジャンルはバロック時代の音楽とジャズ。

ゴング

ガムランの中では最も大きな楽器である銅鑼。表面にはコブがついている。大きさの違う銅鑼を組み合わせる使用が多い。全体の始まりを大きな音で示す楽器であり、特に神聖な楽器として扱われている。

スルントム

ガムランの中で基本となる旋律を鳴らす楽器のひとつ。サロンと名の付く楽器群とは似ているようで異なり、ブリキなどで出来た共鳴胴の上に鍵盤を並べ、フェルトで巻いたバチで叩いて音を出す。柔らかい音色を出す。

ホナン・バルト

12～14個の小型の銅鑼を、コブが上に来るように2段に並べ、それを木の棒の先に糸を巻き付けたバチ(2本)で叩き、音を出す。基本旋律を奏でるほか、全体をリードするように、先に音を出す役割を持っている。

グニダン

いわゆる太鼓だが、ガムラン合奏では合図を出す指揮者がいないので、テンポを指示する楽器としての役割を持つ。大太鼓、中太鼓、小太鼓などの種類がある。ナンカと呼ばれる木をくり抜き、水牛などの皮を張った太鼓だ。

ガムランについて

「ガムラン」はそもそも古代ジャワ語で「叩く」を意味する動詞「ガムル」に由来するとされ、たくさんの鍵盤打楽器、銅鑼などを使った合奏の音楽を指す。文化的に仏教やヒンドゥー教の影響も強く受けて来たインドネシアでは、王朝文化が発達し、その中心として合奏音楽も長く受け継がれた。それが主にジャワ島とバリ島に残るガムランである。

近代に入ってから世界的に注目され、19世紀末のバリ万博でその生演奏を聞いたドビュッシーの心を捉えた。20世紀後半でもケージ、武満徹、西村朗といった現代音楽の作曲家たちの関心を集め、ガムランに影響を受けて作品を書く作曲家も多くなった。ガムランは伝統的でもあり、また現代的でもあるのだ。

スリン

縦型の笛で竹製。吹き口のところに籐で作った小さな輪が付けられている。音階によって、穴の数が違っている。鳥のさえずりにも似た音から、より甲高い音まで出すことができ、大事な旋律を導く楽器として使われる。

クノン

木の枠の上に紐を張り、そこに置いて演奏する金属製の打楽器。コブが上に来るように置く。小さなバチで叩くが、それは高音で伸びのある音となる。演奏される楽曲の大事な部分で鳴らされる楽器でもある。

サロン・ドゥムン

木槌で叩く鍵盤打楽器のなかで最も大きなもの。空洞のある大きな木の枠の上に青銅製の鍵盤を並べ、木槌で叩いて音を出す。ただ、余韻が長いので、叩く前に前の音をミュートさせたりすることが多い。鍵盤数は7枚。

ルバブ

中国の胡弓などと同じ種類の擦弦楽器。木製の胴に牛の胃袋などの内臓の皮を張り、真鍮製の1本の弦を上から下に巻いて折り返し、2本の弦としている。弓は馬の毛を使っていたが、現在は合成繊維が多くなった。

こういう場所で聴ける

インドネシアのかつての王宮があった街で演奏されることが多く、宗教とも深い結びつきを持つガムラン。本場にはたくさんの演奏団体があるが、日本でもガムランに魅せられ研究をしている人々もいるので、根気よく検索すれば、演奏会の情報に出会えるだろう。

日本各地にも研究・演奏団体があり、本場からの来日公演もある

日本国内では沖縄芸術大学にジャワ、バリ双方のガムランのアンサンブルがあり、東京藝術大学、東京音楽大学付属民族音楽研究所にもガムランのアンサンブルがあるので、そうした学校のホームページをチェックしてみると演奏会の案内が出て来るかもしれない。またガムランを自分たちのサウンドに取り入れたロック・バンドなどがあり、ガムラン・アンサンブルのために新作を提供している作曲家もいるので、そうした作曲家を探して、演奏会の情報を得たりすることも実演に近づく一歩となるかもしれない。

Pyotr Ilyich Tchaikovsky チャイコフスキーとクリン



家の前の景色

都会の生活に疲れたチャイコフスキーが安住の地として選んだクリンは、偶然なのか彼が最後に過ごした場所となりました。

都会での生活

ロシアの現在の首都モスクワから西へ遠く離れた、ウラル地方のヴォトキンスクで生まれ育ったチャイコフスキーは、幼少期より自然に親しむ生活をしていました(ちょうど東

京から鹿児島と同じ距離です)。のちにベトログラード(現在のサンクトペテルブルク)で法科学生、音楽院生としての学生時代を過ごすも、卒業後すぐにモスクワ音楽院に引き抜かれ、教鞭を取りつつ、作曲活動を始めました。しかし、喧騒とした

都会モスクワでの生活にだんだんと疲れてきたチャイコフスキーは、1878年(38歳)、12年間教えたモスクワ音楽院の教壇から降り、インスピレーションを求めて各地を転々とするというスタイルで生活するようになりました。しかし、これも心身ともにかなりの負担になります。

まず、1885年(45歳)の時に、マイダノヴォという村に居住を移します。ここはクリンの中心部から数キロ離れた小さい村で、ここでもうと3年間過ごしています。さらにそのすぐ後に、同じくクリン中心部から10キロほど離れた、フロロフスコエという村に家を借り、ここでも3年間過ごしています。チャイコフスキーがこの地にここまで固執していたのは、モスクワから距離のある田舎であるにも関わらず、モスクワへの直通鉄道がクリンまで通っており、モスクワでの仕事もこなすことができることにありました。残念ながら上に記した2つの村での家は取り壊されてしまいました。

理想が詰まった最後の家

そして1892年2月、弟のアナトールへ、「クリンに家を一軒借りたよ。おそらく君もここを知っているだろう...サハロフの家だ。大きくて、



クリンの家

フスキーは、朝と夜の散歩を日課とし、それ以外の時間は曲または手紙を書き、はたまた遠方からきた友人、たまたま近くを通りがかったご近所さんが家に来ては楽しい時間を過ごす...という自由な生活を送っていました。

この家には、1885年にベトログラードのピアノ会社ベツカーから送られたピアノを入れており、家に招いた客のためにピアノを弾くこともあれば、来客と一緒に連弾することもありました。そして夜は、友人たちと文学作品を互いに朗読することもあったそうです。

また、たくさんの家族の写真、そして自身の尊敬する作曲家のイラストを壁に掛けていました。そこにはバッハやモーツァルト、ベートーヴェンなど、音楽史の中心にいる作曲家のほかに、ルビンSTEIN兄弟(アントンとニコライ)の写真を2つ、そして誰よりも大きな絵として、アントンを真ん中に掲げていました。

クリンの家の応接間。ベツカーのピアノ、そして手紙を書くための机が並んでおり、机の後ろには尊敬する作曲家たち、そして家族の写真が掛けられています。



この家に引越してからは、交響曲第6番《悲愴》の作曲を開始。マイダノヴォクリン近郊の村に越してきた際、近所の職人に白樺の木を使って作ってもらった机の上に楽譜を広げ、来客や散歩の合間を縫ってせつせと作業に取り組んでいました。そして引越してから一年半近くが経った1893年10月20日、仕上がりたての《悲愴》の楽譜をトランクに詰め、モスクワへ向けてこの家を後にしました。しかし、チャイコフスキーがこの家へ帰ってくることはありませんでした。モスクワに到着したチャイコフスキーは、まず自分が教鞭を取っていたモスクワ音楽院へ向かい、短いリハールを経たのちに、学生オケによる《悲愴》の私的初演を行います。そこで若干の修正を加えたのち、28日にベトログラードで《悲愴》を自らの指揮で初演し、その9日後の11月6日、同地で急死

しました。

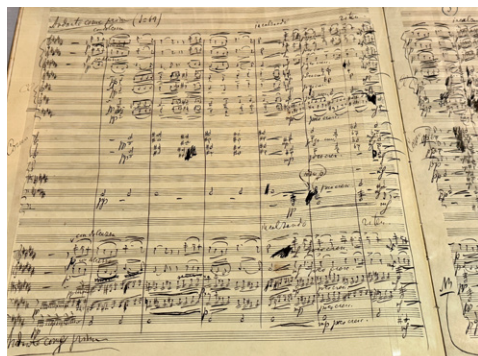
結局、将来的に購入したいと思っていたほどに、チャイコフスキーの理想が詰まったこの家で完成させた曲は、交響曲第6番《悲愴》、そしていくつかの小品のみとなつてしまいました。チャイコフスキーの死後、使用人のソフロノフによつて土地が買い上げられたものの、この家を永続的に保存することを考えた弟のモデストが土地を再購入し、ソフロノフが住んでいた建物を楽譜の保管庫に

します。遺族がそこまでしてこの家を残したいと思つたのは、やはりチャイコフスキーがこの家、そしてこの地に抱いていた愛情の大きさが故なのでしょう。

筆者がここを訪ねた際も、家の居心地の良さもさることながら、チャイコフスキーの作曲机から見える森の景色がなんとも素敵だったことを覚えています。きつとチャイコフスキーは、幼い頃から親しんだ自然にインスピレーションを求めているのかもしれない。



チャイコフスキーが作曲していた机。彼がこの家を後にしてからも机の位置は変わっていないそうです。



《悲愴》の自筆譜(現物)

大井 駿(文&写真)

指揮者、ピアニスト、古楽器奏者。1993年、東京都出身。第1回ひろしま国際指揮者コンクールにて優勝。パリ、ミュンヘン、ウィーン、ザルツブルク、バーゼルにて、ピアノと指揮と古楽を学ぶ。読売日本交響楽団、東京都交響楽団、広島交響楽団、モーツァルテウム管弦楽団等と共演。

遅咲きの作曲家、セザール・フランク

— ヴァイオリン・ソナタと弦楽四重奏曲



ベルギー生まれのフランスの作曲家、セザール・フランクはヴァイオリン・ソナタやピアノ五重奏曲、交響曲などで知られるが、その主要作品は極端に晩年に偏っている。晩成型のフランクが真の成功を味わったのは世を去る半年前のことだった——

飯尾 洋一（音楽ライター）

著書に『クラシックBOOK この一冊で読んで聴いて10倍楽しめる!』新装版（三笠書房）、『クラシック音楽のトリセツ』（SB新書）、『マンガで教養 やさしいクラシック』監修（朝日新聞出版）他。テレビ朝日「題名のない音楽会」音楽アドバイザーなど放送の分野でも活動する。

名曲

第4回

誕生!

みんなが私のことをわかってきたようだ

1890年4月19日、パリのサル・プレイエルで開かれた国民音楽協会の演奏会で、セザール・フランク（1822〜1890）の弦楽四重奏曲二長調が初演された。初演は大成功を収め、聴衆は総立ちになって作曲家を讃えた。予想外の成功を収めて、フランクは弟子たちに向かってこう言った。

「ほら、ごらん。みんなが私のことをわかってきたようだよ」

だが、これはフランクの68年間の人生で最初の真の成功であり、この年の11月、作曲家は世を去る。あまりに遅すぎた成功と言っほかない。多くの大作曲家は早熟の天才だが、フランクは極端に遅咲きの作曲家なのだ。

フランクの代表作といえば、まっさきに思いつくのがヴァイオリン・ソナタイ長調（1886年）と交響曲二短

調（1888年）。どちらも60代に入ってから作品だ。ほかの主要作品も交響的変奏曲（1885年）、前奏曲、コラールとフーガ（1884年）、ピアノ五重奏曲へ短調（1879年）など、ことごとく人生の終盤に書かれている。

しかし、最晩年の弦楽四重奏曲が最初の成功作というのは、いくらなんでも言いすぎではないか。だってその頃にはあの名作、ヴァイオリン・ソナタがすでに書かれていたじゃないの？

そんな疑問を抱く方もいるだろう。たしかに、ヴァイオリン・ソナタは時代を代表する名曲だ。ベルギー生まれのフランクはこの曲を同郷のヴァイオリニスト、ウジェーヌ・イザイに贈る結婚祝いとして作曲した。フランクから見ても、イザイは同じリエージュ音楽院で学んだ36歳年下の音楽家。結婚式当日に楽譜が届き、イザイは居合わせたピアノニ

トと大慌てでリハーサルをして、式の参列者に曲を披露した。イザイはもちろん作品を気に入り、世界中でこの曲を演奏する。フランクは大いに満足した。

だから、作品としては成功しているのだが、パリの聴衆にとってみれば、それは遠く離れた土地の出来事。公開の初演もブリュッセルで行われている。弦楽四重奏曲こそがパリにおけるフランクの初めての決定的成功だったのだ。

まるで交響曲みたいな大作、弦楽四重奏曲

現在、ヴァイオリン・ソナタはありとあらゆる名手たちが演奏する名曲になっている。一方、弦楽四重奏曲はそこまでの人気作とはいえない。演奏機会が少ない理由のひとつは、おそらく作品の長大さにある。45分から50分程度の長さは、弦楽四重奏曲としてはかなり長い。演奏会で聴く機

会が少ない反面、多数の録音がリリースされているのは興味深い。

ドイツ音楽の影響を色濃く受けるフランクにとって（母方はドイツ系だ）、弦楽四重奏曲を書くことは、ベートーヴェンの後期四重奏曲の先にある芸術を探索するということでもあった。となれば、後期ベートーヴェンがそうであったように、作品が長大化するのも必然だったのかもしれない。

フランクの弦楽四重奏曲は4楽章からなり、ドイツ系の交響曲のような威容を誇っている。第1楽章は入念な序奏ではじまり、主部には暗い情熱が渦巻く。第2楽章はスケルツォ。メンデルスゾーン風の妖精の羽ばたきで軽やかに始まるが、トリオは内省的だ。第3楽章はラルゲット。真摯な祈りの歌が奏でられる。ベートーヴェンの弦楽四重奏曲第15番の「病より癒えたる者の神への聖なる感謝の歌」

酷評などどこ吹く風の鬼メンタル!

を連想する人も少なくないのでは。第4楽章では冒頭で先行楽章の主題が回想される。まるでベートーヴェンの「第九」だ。さまざまな主題が有機的に絡み合っ、巨大なフィナーレを築く。聴き終えた後の充実感、ベートーヴェンの後期作品に勝るとも劣らない。

ヴァイオリン・ソナタと並ぶもう一曲の代表作、交響曲はどうだったのかといえば、この曲の初演は無残な失敗に終わっている。1889年2月17日、パリ音楽院演奏会協会による初演で、オーケストラの楽員の大半は演奏に反対だった。フランクのよき理解者であった指揮者ジュール・ガルサンが熱心に後押しして、演奏にこぎつけた。

だが、指揮者だけが熱心でも、楽員がその気にならなければよい演奏は難しい。聴衆

は曲が理解できず、音楽院の教授陣も冷淡な態度をとった。ひどいのは作曲家グノーだ。「無能の主張が教義にまで達している」と作品を酷評した。それでもフランクは平然として、自作の出来ばえに満足げだったという。

同じグノーがサン＝サーンスの交響曲第3番「オルガン付き」に対して「フランスのベートーヴェンだ」と作品の真価を見抜いたことを思えば、この酷評は残念と言っほかない。

フランクのプロフィールは、同世代のオーストリアの作曲家ブルックナーによく似ている。大作曲家としては珍しく晩成で、オルガニスト出身で、敬虔なクリスチャン。作風は重厚で、構築感を重視する。死後の評価が生前の名声をはるかに上回る。

フランクの交響曲を聴いたグノーには、せめて「フランスのブルックナーだ」と言っほしかった。

フランク：弦楽四重奏曲二長調、他 ダンテ四重奏団 Hyperion

ダンテ四重奏団は1995年に結成されたイギリスを中心に活動するクアルテット。2007年のアルバム録音時のメンバーはヴァイオリンのクリシア・オソストヴィッツ、ジル・フランシス、ヴィオラのジュディス・パスブリッジ、チェロのバーナード・グレゴール＝スミス。ひりひりするようなパッションと集中力で、フランク作品に横溢する濃密なロマンティズムをあますところなく表現する。カップリングはフォーレの弦楽四重奏曲ホ短調。

Spotifyなど、
ストリーミングサービスで
も聴けます!



おすすめ
音源

■ 2024(令和6)年度 第2回理事会

開催：2025年3月7日(金) ホテルニューオータニ大阪
承認事項：① 2025(令和7)年度事業計画書及び収支予算書
② 2024(令和6)年度臨時評議員会の招集と議題
報告事項：① 第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ 募集要項
② 会長、理事長、常務理事の2024年度の職務の執行状況

■ 2024(令和6)年度 臨時評議員会

開催：2025年3月26日(水) ホテルニューオータニ大阪
承認事項：① 2025(令和7)年度事業計画書及び収支予算書
② 評議員1名の選任
新任評議員：神之浦 善紀(株式会社大林組)
報告事項：第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ 募集要項

■ 2025(令和7)年度 助成金交付予定事業

2025年度の助成金交付事業を決定する選考委員会を
1月31日(金)に開催し、厳正な審議の結果、8件が選考されました。
① アンサンブル・ファルケ 爆奏新感覚公演vol.8
フィンランドからの贈り物
② 詩を奏でるイザイの詩曲 第一夜／日本、ベルギー友好160周年記念
③ アミティ・カルテット 弦楽四重奏リサイタル

④ SPAC-E#7 ポートレート・シリーズ3:本堂誠
⑤ アンサンブル天下統一 アンサンブル・アカデミー
⑥ Reise String Laboratory vol.4
⑦ プロジェクトQ・第23章
～若いカルテット、シューマン&ブラームスに挑戦する
⑧ 第5回芦屋国際音楽祭

選考委員

委員／青澤 隆明(評論)
宇野 文夫(作曲家・神戸学院大学教授)
三枝 まり(小田原短期大学准教授)
沼野 雄司(桐朋学園大学・大学院教授)
横原 千史(評論)
(委員名50音順)

■ 2026(令和8)年度 助成金募集について

募集開始：2025年9月1日(月)
募集締め切り：2025年10月31日(金)
お問い合わせ：公益財団法人 日本室内楽振興財団
電話 06-6947-2183
詳細は8月頃、ウェブサイト(https://jcmf.or.jp)で
発表予定です。

公益財団法人 日本室内楽振興財団 支援企業

大阪ガス株式会社	住友生命保険相互会社	カナデピア株式会社	非破壊検査株式会社	株式会社JTB
関西電力株式会社	大樹生命保険株式会社	川崎重工業株式会社		株式会社電通
	東京海上日動火災保険株式会社	株式会社クボタ	大塚製薬株式会社	株式会社ニュー・オータニ
住友電気工業株式会社	日本生命保険相互会社	ダイキン工業株式会社	住友化学株式会社	
ソニーグループ株式会社		日本製鉄株式会社	積水化学工業株式会社	KDDI株式会社
株式会社東芝	野村證券株式会社	三菱重工業株式会社	武田薬品工業株式会社	西日本電信電話株式会社
日本電気株式会社			日本ペイント株式会社	
パナソニック ホールディングス株式会社	アサヒビール株式会社	株式会社日建設計		株式会社読売新聞大阪本社
株式会社日立製作所	サントリーホールディングス株式会社		近畿日本鉄道株式会社	株式会社読売新聞東京本社
富士通株式会社	ハウス食品グループ本社株式会社	株式会社大林組	京阪電気鉄道株式会社	日本テレビ放送網株式会社
ローム株式会社		鹿島建設株式会社	南海電気鉄道株式会社	読売テレビ放送株式会社
	東洋紡株式会社	株式会社きんでん	西日本旅客鉄道株式会社	
株式会社関西みらい銀行	株式会社ワコール	株式会社鴻池組	阪急電鉄株式会社	(関連業種別 五十音順)
株式会社みずほ銀行		清水建設株式会社	阪神電気鉄道株式会社	
株式会社三井住友銀行	伊藤忠商事株式会社	大成建設株式会社		
三井住友信託銀行株式会社	岩谷産業株式会社	大和ハウス工業株式会社		
株式会社三菱UFJ銀行	株式会社千趣会	株式会社竹中工務店		
株式会社りそな銀行	三菱商事株式会社			



第12回 大阪国際室内楽コンクール&フェスタ
参加団体募集！

[申込期間] 2025年 4/1(火)～10/12(日)

第12回 大阪国際室内楽コンクール

会場／住友生命いずみホール(大阪)

第1部門 弦楽四重奏 第2部門 ピアノ三重奏／ピアノ四重奏

応募資格／国・地域に関係なく1990年5月18日以降に出生した演奏家によって編成される団体

賞金各部門

〈第1位〉250万円 〈第2位〉120万円 〈第3位〉80万円
各部門の第1位受賞団体は、日本国内の約10都市で開催される演奏会ツアー「グランプリ・コンサート」に招聘される。

特別賞

ブリテン・ピアーズ・アーツ賞／ミュージック・イン・平昌賞
ボルドー弦楽四重奏フェスティバル賞／ストリング・カルテット・ビエンナーレ・アムステルダム賞
第12回大阪国際室内楽コンクールアンバサダー賞／MK記念会特別協力



〔新作委嘱作曲家〕
酒井健治
大阪出身／京都市立芸術大学准教授
コンクール第1部門
3次ラウンド課題曲を委嘱

第12回 大阪国際室内楽フェスタ

2～6名の器楽アンサンブル(クラシック音楽、民俗音楽、伝統音楽などジャンルは不問)

楽器編成自由 課題曲なし 審査員は公募！

1次ラウンド会場[富山] 富山県高岡文化ホール [演奏曲] 自由(審査は3ラウンド／1ラウンドあたり25分以内)
1次ラウンド会場[三重] 三重県文化会館 [資格] 年齢制限はありません
セミファイナル・ファイナルラウンド会場[大阪] 住友生命いずみホール

賞金各部門

〈メニューイン金賞〉100万円 〈ファイナリスト賞(3団体)〉各30万円
メニューイン金賞受賞団体は、日本国内の約10都市で開催される演奏会ツアー「グランプリ・コンサート」に招聘される。

特別賞

セミファイナルラウンド出場団体から各1団体に授与
〈フォークロア賞〉10万円／〈キーボードアンサンブル賞〉10万円／〈ストリングアンサンブル賞〉10万円
〈パーカッションアンサンブル賞〉10万円／〈ウィンドアンサンブル賞〉10万円／〈ニューウェイブ賞〉10万円

第12回のコンクールで審査委員長を務める
モニカ・ヘンシェルよりメッセージ

審査委員長就任については誇りに思っていますが、前任の方がいわば伝説的な方ですので、その後を引き継ぐことはとても大変なことであると受けとめています。
ですので、私一人でというのではなく、審査委員の皆さんと一つのチームとしてコンクールに臨んでまいります。
私がヘンシェル・カルテットとしてこのコンクールで優勝したころに比べてコンクールのやるべきことが変わってきたように思います。
当時のコンクールは新しい素晴らしい才能を見つけるということが1番の目的だったように思いますが、今はコンクールとしてやらなければならないことがもっとあります。
一つは素晴らしい才能を見つけることではありますが、二つ目としてコンクールを通してネットワークを作ることが大事だと思います。ネットワーク作りを通して、このコンクールが長く続けていけるような環境を作ることが大事だと考えます。

審査委員長のモニカ・ヘンシェル



前審査委員長の堤剛



© 鍋島徳恭